

寛容と忍耐の人

江崎 真澄

新宮殿のお手洗いで、大平さんと並んで用を足していた。「ああよかった」と、大平さんが歓声をあげた。びっくりして横を向くと、「よかった。いま石が出たよ。石が……」と、ほっとした様子だった。「ほう、よかったね。宮中の便所で石が出るなんて元日から縁起がいいね」といいながら階段を昇って、新年祝賀式場に移るおおぜいの列の中へはいった。昭和五十二年元旦の出来事である。大平さんは、前年の十二月二十四日、クリスマスイブに組閣を終えた福田首相を支える党の幹事長で、私は総務会長であった。元氣そのもので忙しい毎日の日程をこなしておられたが、人にはそれぞれ、他人にはいえない病氣や悩みことがあるものだと思う。

一年が過ぎ、内閣改造が行われることになった。大平さんの幹事長留任は決まっていたが、内閣改造に先だって党の二役を決めることになっており、福田邸の大平さんから電話がかかった。福田首相は、あなたを内閣にとといわれるが、政調会長に横すべりして党に留まってほしい。河本君は通産大臣で入閣する。総務会長には中曽根君を考えている。まかせてくれるかという話で、「もう一年僕と一緒に苦労して下さいよ」といわれた。大平さんの友情がにじみ出る言葉に、私は心を揺さぶられた。こうして大平幹事長時代の二年間を党三役の一人として一緒に仕事をした。お世辞めいたことは決していわない人だが、誠実で暖かかった。大平さんの人柄や考え方がよくわかってきたから仕事もやりやすく、充実した日々を送ることができた。それはやはり大平さんの人物が大きく、すべてをまかせてくださったことによるところが多い。福田首相のためにも、誠心誠意よく尽されたか

ら、福田さんも党のことは心配なく、思いきり政務に専念できたことと思う。

その福田さんと大平さんが、五十三年十一月黨員による初めての公選制のもとで、総裁の座を争うことになった。名古屋へこられた大平さんは、別室で私に「自分も六十八歳、総理の仕事に耐えられる健康の限界というものがあつた。最後の機会かも……」と、しみりと話された。私は二年前の元日宮中での出来事を思い出して、大平さんの並々ならぬ決意を感じた。大平さんは、マスコミの予想を大きく上回る得票で総裁の座につかれた。大平内閣は十二月七日、組閣を完了し、私は通産大臣に任じられた。また、大平首相外遊の折には、再度臨時首相代理を仰せつかったりした。首相の知遇に応えるためにも、微力の限りを尽した記憶はまだ生々しい。

大平首相は、五十五年の四月末から連休を利用してアメリカを訪問された。あとメキシコ、カナダと回られたところで、チトー大統領の死で、急遽その足でユーゴスラビアに向われた。その日私は、政府特使として首相の親書を携行、メキシコ大統領に会見して油外交をフォローするよういつかり、首相とバンクーバー空港ですれちがった。「お元気で発たれました」と総領事から聞いたが、十五日役目を果たして成田空港に帰ってくると、首相はお疲れてホテルにお休みだから、報告は明日の閣議後にされたい、という連絡がはいった。私はさもあると同情した。翌十六日、メキシコの顛末を手つとり早く報告した。そのあと、十時から議員総会、午後の国会で不信任案可決と政局は急変した。電話では度々お話をしたが、選挙にはいる直前、二十分ほどお会いする機会があつた。「野党に同調しながら党は出ないという。国や党のことを考えると、ここはどんなことがあつても忍ばねばならない。与野党僅差が、こつこつことをさせるんだから、選挙は何としても勝たなくちゃ……」、「澄んだ心境を語られ「しっかり頼む」と、固く手を握られた。大平さんは寛容と忍耐の限りを尽してこの世を去って行かれた。そのことが党の大勝をもたらした。

(衆議院議員・第一次大平内閣通商産業大臣)